

平成18年度見学会に参加して

山本 毅*

新潟応用地質研究会・地盤工学会北陸支部・日本技術士会北陸支部・日本応用地質学会北陸支部の共催による、平成18年度見学会が平成18年10月20日に行われ、今回私は初めて参加させていただきました。

今回の見学地は新潟県岩船郡朝日村にあるゴールドパーク鳴海、奥三面ダム、奥三面歴史交流館でした。

午前8時に新潟駅を出発し、日本海東北自動車道～国道7号線～朝日スーパーラインを経由して、午前11時30分頃に最初の見学地であるゴールドパーク鳴海に到着した。ここでは、おもに鳴海金山の採掘跡が見学地であった。バスから降りた後、採掘跡地までは山道を徒歩で20分程度。当日はあいにくの雨であったため、山道が濡れていて滑りやすく、歩くのにやや難行した。また、雨天のため山々のみごとな紅葉が見られなかったのも残念であった。採掘跡地である坑道に入ると、中はヒンヤリとしており、本道のほかにもタヌキ掘りといわれる試掘した坑道も多く残されていた。細い坑道を奥に進むと急に広い空間が現れた。いわゆる鉱床地で最盛期には多くの金がここから採掘されていたのであろう。その空間の大きさ、ここにいたるまでの坑道の多さを考えると、ろくな機械のなかった時代に、どれだけの手がかかっていたのかと感慨が深くなった。資料をみると、鳴海金山は西暦807年に発見され、戦国時代に採掘の最盛期を迎えたとある。当時は全国の金採掘量の3分の1を占めていて、のちの佐渡金山よりも多かったと言われているとのことで、その埋蔵量の多さにも驚いた。

次にバス中で昼食を取った後、朝日スーパーラインを走り、2番目の見学地である奥三面ダムに向かった。奥三面ダムは、2001年に竣工したアーチ式コンクリートダムで、洪水調整、流水の機能維持、発電等を目的とした多目的ダムである。現地に到着してまず、まるで要塞のようなダムのスケールの大きさに驚かされた。人間の手によって、これほどの建造物を作りあげることができるかと思うと、感慨もひとしおである。その後、ダム管理をしている事務所において、モニターを見ながら所長さんの説明を聞いた。貯水量や発電量の大きさのほかに、ダム建設にあたっての周辺環境への配慮や、建設後～現在においてもいろいろ細かく観測データを取り続けていることに驚かされた。今後においても、開発行為と周辺の環境対策、保護というのは我々技術者に課せられた重要なテーマとなることであろう。また、ダム建設によって、ダム湖に沈んだ集落があることも知り、ここから離れていった人たちのことを思うと「公共の利益」について考えさせられた。

*株式会社新研基礎コンサルタント

次に最後の見学地として奥三面歴史交流館に向かった。奥三面地域では、多くの遺跡が発掘されており、とくに縄文時代の遺跡が多く全国的にも貴重な発見が多く見つかっている。奥三面歴史交流館ではこれらの縄文期の遺跡物を中心に、現代に至るまでのこの地域の民族史を展示している。展示物の前半には縄文遺跡より発掘された土器、石器、装飾物等が多数あった。それらは思っていたよりも精巧に作られていた。交流館職員の方の説明を聞いても、縄文人の文化レベルの高さを感じられた。後半部では奥三面の人々が最近まで使っていた民具や、山での生活様式などが展示されていた。当時の人々の生活の大変さとともに、それに対応した生活の知恵や工夫がみられて興味深かった。今ではこれらの集落はダム湖に消えているため、こういった歴史交流館施設等によって、これらの技術や生活様式を伝えていくことはとても重要なことであると思われた。

今回の見学会を通じて、人間の「開発行為」について考えさせられたことが多かった。ゴールドパーク鳴海や奥三面ダムをみると、人がなす開発力の凄さを感じた。それとともに「公共の利益」というものの難しさや、「自然」との関係性については、今後我々が抱えていく問題であろうと思われる。

見学会はやや時間をおしたものの、無事終了しました。丸1日をかけて、有意義な時間を過ごさせていただきました。最後に各見学地のご担当各位、参加者の方々、そして幹事の方々に深く感謝いたします。